

やまと 民俗への招待

元且未明、往馬大社(生駒市若分町)の追鶏祭を見に出かけた。

午前3時、拜殿の両側で大トンドがたかれるなか、神事が始まった。終わると宮司と禰宜の2人は、南北に長い高座へ上り、まず「これはどこの鶏追い、ダイショウイン(大勝院)の鶏追いと唱え、小刻みに床を踏みしめながら、南から北へ鶏を追う所作をする。次には北から南へ「これほどこの鶏追い、ホウショウイン(宝勝院)の鶏追い」と元に戻り、再び南

から北へ向かって「これほどこの鶏追い、往馬大社の鶏追い」と唱えて進む。北と南の座小屋でも、これに合わせて2人ずつの氏子が、同様の所作をして西東に行き来する。

この5分ほどの行事には、神功皇后が三韓出兵の折り、鶏が鳴かなかつたために出発が遅れ、怒って生駒川に鶏を流したという伝説が付随している。このため氏子は鶏は食べて



追鶏祭で、鶏を追う所作をする宮司と禰宜
—生駒市で1日午前3時半過ぎ、筆者提供

もいいが飼ってはならないとされたという。

養鶏禁忌の伝承は全国的に分布し、出雲の美

保関でも鶏が時を間違えて鳴いたため、事代主命がワニに手をかまれ、鶏を飼わないようになったという。

県内でも金鶏や金鶏、夜泣き封じに鶏の絵を描いて逆さまにしてカマドに貼るなどさまざまな鳥に関わる民俗が伝わっているが、

こうした民俗は世界にも広がっている。ソクラテスが毒を仰いで、いまわの際に発した言葉は、いまだ神に捧げらる。

ていない鶏のことだった。アリストパネスの喜劇にも、時を告げる鶏が登場する。紀元前4、5世紀のギリシアには、鶏が普及していたと言われるが、さらに西に拡がり、魔除けと風見を兼ねた屋根の鶏となった。

夜と昼を識別して、時を告げる能力を持った鶏へのある種の畏怖は、光と闇の世界に対する長い間の人間の心意を反映しているのだらう。

新年告げる鶏の祭り

(奈良民俗文化研究所
代表・鹿谷勲)

—隔週掲載